

高齢者の仕事の意義

Significance of work for elderly people

金 美辰

大妻女子大学人間関係学部人間福祉学科

Mijin Kim

Department of Human Welfare, Faculty of Human Relations, Otsuma Women's University

2-7-1 Karakida, Tamashi - Tokyo, 206 -8540 Japan

キーワード：高齢者，仕事，社会参加，主観的健康感，主観的幸福感

Key words : Elderly people, Work, Social involvement, Subjective health perception, Subjective well-being

抄録

本研究では、「高年齢者等の雇用の安定等に関する法律」（以下、高年齢者雇用安定法）が一部改正され、2021年4月1日施行され65歳までの雇用確保（義務）に加え、65歳から70歳までの就業機会を確保するための措置が新設されたことを受けて高齢者にとっての仕事の意義を明確化することを目的とした。高齢者の仕事に関する意義についての文献を検索するため、Cinii および医中誌のデータベースを用いて「高齢者」「仕事」「意義」のキーワードを組み合わせて検索を行い、8件の文献を抽出した。結果から、高齢者の仕事は人との交流を通じた社会参加を促進し、高齢者自らが健康への配慮を行うことで近年重視されている健康寿命の延伸につながる好循環を生み出すことが仕事を行う意義の一つであると考えられる。また、高齢者は仕事という社会活動を通して身体を動かすことで主観的健康感が高まり、心理機能にもポジティブに作用し介護予防にも効果があるなど、仕事には高齢者の心身に良い影響をもたらす意義があると推察される。

1. 目的

2021年8月現在の平均寿命は女性87.74歳、男性81.64歳と男女ともに過去最高を更新^[1]し、高齢化率は28.4%^[2]となった。このような平均寿命の延伸や急激な高齢化に伴い、高年齢者が年金受給開始年齢までに意欲と能力に応じて働き続けられる環境の整備を目的に高年齢者雇用安定法が一部改正され、2021年4月1日施行された。今回の改正^[3]では、65歳までの雇用確保（義務）に加え、65歳から70歳までの就業機会を確保するための措置が新設された。健康日本21（第二次）^[4]においても、雇用・年金制度改革として70歳までの就業機会の確保が述べられる等、我が国では高齢者の雇用確保への取り組みがなされている。

我が国の急激な少子高齢化は人口構造に変化をもたらし、年金や医療等の社会保障制度にも影響を及ぼしている。そのうえ、政府の老後に必要な資金に関する発表等で、老後の資金不足に不安を感

じている現状にある。独立行政法人労働政策研究・研修機構（JILPT）の「高年齢者の雇用・就業の実態に関する調査」^[5]では、65歳以上まで働きたいと考えている人の割合は6割を占め、高年齢者の雇用は喫緊の課題である。

平均寿命の延伸による退職後期間の長期化、医療費や介護保険サービス利用料の自己負担額増等で「健康寿命」がより重視されるようになった。厚生労働省は、平均寿命の延伸に伴い、健康寿命との差が拡大すれば、医療費や介護給付費の多くを消費する期間が増大することから、疾病予防と健康増進、介護予防などによって、平均寿命と健康寿命の差を短縮することができれば、個人の生活の質の低下を防ぐとともに、社会保障負担の軽減も期待できるとしている。2019年3月28日に発表された厚生労働省「健康寿命のあり方に関する有識者研究会」の報告書^[6]では、健康寿命延伸の目標として「2040年までに男女ともに3年以上延伸

し、75歳以上を目指す」と示し、国を挙げて健康寿命延伸を目標に介護予防にも力を注ぐことになった。

2015年の介護保険制度改正では予防重視型のシステムに変換され、介護予防が「介護予防・日常生活支援総合事業として位置づけられ、国民自ら健康の維持や介護を予防することが求められるようになった。2018年には介護保険制度の地域支援事業として更なる強化がなされた。介護保険法第4条「国民の努力及び義務」及び「介護予防・日常生活支援総合事業ガイドライン」の総合事業に関する総則事項において、自助努力による介護予防が求められている。

高齢期の過ごし方をより豊かにする要素について先行研究において浜崎^[7]らは自由になる時間に行う社会活動が重要な要素であると指摘しており、中村ら^[8]は、社会活動は高齢者の身体機能を維持させとしている。さらに李^[9]は、高齢期に突入した時期の生活を意味のある幸福な生活には、社会活動への参加を活性化させることが必要であると述べている。また深堀ら^[10]は高齢者の主観的幸福感が高い場合、介護予防への負担感が軽減され、介護予防行動を引き起こすとしていることから、高齢者の社会活動は、主観的幸福感を高められとともに介護予防においても重要であると考え。そして橋本ら^[11]は社会活動を「個人活動」「社会参加・奉仕活動」「学習活動」「仕事」と分類している。

この社会活動の一つである「仕事」と介護予防との関連について、近藤^[12]は介護予防のためには、高齢者が就業など社会の中で役割をもち、社会に参加して活躍できる場を増やすことが重要であると指摘しており、急激な少子高齢化による人口構造に変化に伴う年金や医療等の社会保障制度への不安が高まる現状から、仕事という役割を通じた高齢者の社会参加は不可欠であると考え。そこで本研究では、先行研究から社会参加の一つである高齢者の仕事の意義を明確することを目的とした。

2. 方法

本研究では高齢者の仕事に関する意義についての文献を検索するため Cinii および医中誌のデータベースを用いて「高齢者」「仕事」「意義」のキーワードを組み合わせて検索を行い 160 件の文献を抽出した。次に文献のタイトルや抄録を検討し、

必要に応じて本文の内容を確認して、高齢者にとっての仕事の意義を整理した。学術文献ではない 28 件と Cinii と医中誌のデータベースで重複している文献 4 件を除外し、128 件の文献を抽出した。そのうち、患者を対象にした文献 45 件、援助者を対象にした文献 24 件、家族を対象にした文献 14 件、リハビリテーションプログラムを対象にした文献 38 件を除外した。高齢者を対象にした文献 7 件に引用文献の文献を 1 件追加し、調査研究の内容である 8 件の文献を抽出した (図 1)。

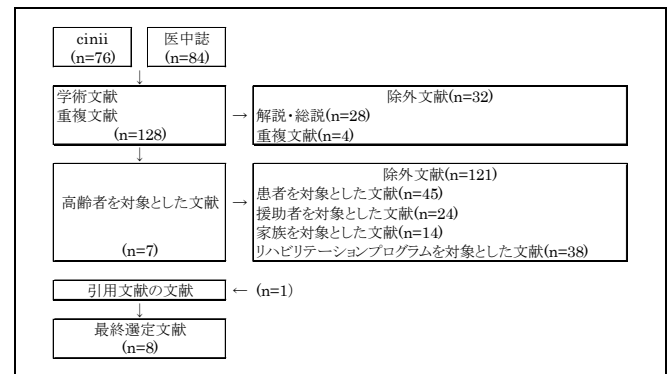


図 1 文献検索の過程

これらの高齢者の仕事について報告している 8 件の文献は「仕事の価値・意味」に関する文献が 3 件、「仕事の身体・心理への影響」に関する文献が 5 件であった。

なお、今回の研究は刊行された文献に依拠するものであり、個人情報の取り扱いに関して特段の倫理的配慮を要するものではないと考える。

3. 結果

3.1. 仕事の価値・意味

高齢者の仕事に関する先行研究において富松ら^[13]は地域在住高齢者の日常生活動作 (ADL)・生活関連動作 (APDL) の価値序列としてシルバー人材センターの入会説明会に参加した健常高齢者 97 名を対象に調査を行い、第 5 位が仕事・家事 (55.3%) であり、「『仕事 (家事)』は、社会参加により生きがいに繋がる重要な要因と考えられる」と述べており、さらに「対象者の多くは、定年退職等により仕事や役割の喪失を受け、再就労を希望する集合体であるためと考えられた」と高齢者の仕事の意義を示唆している。石谷ら^[14]は動脈硬化健診を受診した後期高齢者を対象に調査を行い収入が厳しい者は 23.7% であり、「主観的な身体

的健康度を維持増進するために、身体的・精神的健康度が相互作用できるよう、運動習慣の維持や仕事を継続することで地域とのつながりをもつことが必要である」と示唆している。

また米澤^[15]は地方農村部シルバー人材センター所属の2016年度登録の会員293名を対象に地域農村部におけるシルバー人材センター会員の就業に対する思いについて質問紙調査を実施した結果、「就業への思いは『仕事を通じて人と交流できる』86名(61.0%)、『働いて賃金を得るのが嬉しい』81名(54.7%)、『働くことで自然と体を動かすことができる』80名(56.7%)が高率な回答であった。就業への思いを性別に見ると、『人から感謝されるがうれしい』『好きなことを仕事としてできるのが楽しい』『高齢になっても働けることがうれしい』『仲間と働くことが楽しい』が、男性よりも女性が有意に多く回答していた。75歳以上の高齢者では働き続けられていることや感謝されることに価値を置き、そのために健康管理に気を遣う様子がうかがわれた」と報告している。

3.2. 仕事の身体・心理への影響

先行研究において杉浦ら^{[16][17]}は山間地域で生活する高齢者を対象に調査を実施し、活動能力指標に対して「毎日するべき仕事の有無」「田畑の世話」などがオッズ比2.0以上($p < 0.001$)と強い関与が認められたと報告しており、さらにこの重要な要因として抽出された「田畑の世話の有無」について追跡調査を実施し、女性よりも男性により良好な方向に関与するとし、「高齢者支援の1手段として「田畑の世話」の実施を促すことには大きな意義がある」と示唆している。

さらに久米ら^[18]はころばない講座を受講した65歳以上の1,598名を対象に調査を行い、「10m全力歩行での特徴は、同地域男女の序列が同じ事である。男女共に農村部が最も高く、市街部、漁村部と続く。共に肉体労働である農村部・漁村部で有意差が現れた事は印象的である。仕事の内容の相違や、酪農業は通年であるのに対し漁業は季節性である事も有意差の一因と考えられる」と述べており、また「40cm踏み台昇降は、漁村部では男性が最も高く女性が最も低い等、同地域男女の序列の相違が現れた。女性は農村部が特に高い割合であった。同地域男女の序列の相違は市街部で小さく漁村部・農村部で大きい事から、漁村部・農村部で

の男女の仕事内容の違いが影響している可能性が考えられる。」と述べている。

またMONMAら^[19]は65～85歳の地域在住高齢者を対象にストレス対処力(sense of coherence; 以下SOC)との関連性の調査を実施し、「前期高齢者の男性では、余暇活動量とSOCとの間に有意な正の関連を認めた($\beta = 0.233$, $p < 0.05$)。また、後期高齢者の男性において仕事関連活動量がSOCと有意な正の関連($\beta = 0.273$, $p < 0.05$)を認めた一方、前期高齢者の女性では、仕事関連活動量とSOCとの間に有意な負の関連($\beta = -0.285$, $p < 0.01$)を認めた」ことから「比較的健康な地域在住高齢者において、身体活動とSOCとの関連性は性や年齢層によって異なり、男性では、前期高齢者は余暇活動が、後期高齢者は仕事関連活動が多いほどSOCが高い」と示唆している。徳山^[20]は朝市活動に着目し調査を実施した結果、「朝市活動の意義に関しては、介護予防になるが80歳以上に有意な差があり、割合が高かった。60歳代と80歳以上の高齢者は、わずかであるが『健康である』と思っている人の割合は高かった。このことは、高齢者が行っている朝市活動が健康をもたらす要因になっている。有意差はなかったものの、わずかではあるが70歳代よりは80歳以上の高齢者の主観的健康感、歯の状態、病気や障害がない人の割合が高かった。朝市活動を行うことが運動習慣を有することになり、そのことにより一定の体力が維持され、主観的健康感や生活満足度などの心理機能にポジティブに作用したことから、朝市活動を行うことが特に80歳以上の高齢者に有効であったと言える。」と述べている。

4. 考察

4.1. 仕事の価値・意味

平均寿命の延伸に伴い、定年退職後の期間が長期化することになった。定年退職等により仕事や役割の喪失を受け、高齢者の社会参加への機会は著しく減少する現状において、富松ら^[21]が指摘しているように「仕事(家事)は、社会参加により生きがいに繋がる重要な要因」であり、さらに石谷ら^[22]が指摘しているように「仕事を継続することで地域とのつながりをもつこと」という社会参加につながることは高齢者が仕事をする大きな意味であると考えられる。

また米澤^[23]は、仕事の価値として賃金を得るこ

とだけではなく、人との交流や人から感謝されることに喜びを覚えることが仕事の価値として捉えられ、「特に75歳以上の高齢者では働き続けられていることや感謝されることに価値を置き、そのために健康管理に気を遣う様子がうかがわれた」と指摘されているように、仕事を行うことで人との交流を通じた社会参加を促進し、高齢者自らが健康への配慮を行うことにより近年重視されている健康寿命の延伸につながると考えられ、高齢者の生活の好循環を生み出すことが仕事を行う価値・意味であると考えられた。

4.2. 仕事の身体・心理への影響

高齢者への身体的影響として杉浦ら^[24]^[25]は「毎日すべき仕事の有無」と「田畑の世話」が活動能力指標に影響を与えていたと報告しており、また久米ら^[26]の調査では農村部の男女が「10m全力歩行」で最も高く漁村部との比較において有意な差があったと報告していることから、毎日の仕事が高齢者の身体や活動に影響を与え、中村^[27]が身体機能の維持・向上に繋がる社会活動を行うことは主観的健康感を高めると述べているように、仕事は高齢者の主観的健康感を高めると考える。さらに古谷野ら^[28]が高齢者の健康度の自己評価は主観的幸福感と関連していると述べていることから、高齢者の仕事という身体的活動は身体の健康に繋がり、その結果として主観的幸福感の向上に繋がると考えられる。

またMONMAら^[29]は「比較的健康な地域在住高齢者において、身体活動とSOCとの関連性は性や年齢層によって異なり、男性では、前期高齢者は余暇活動が、後期高齢者は仕事関連活動が多いほどSOCが高い」と指摘しているように、仕事という身体活動を行うことは、高齢者のストレス対処力の向上に繋がると考える。また、徳山^[30]が朝市活動を行うことが運動習慣を有することで一定の体力が維持され、主観的健康感や生活満足度などの心理機能にポジティブに作用すると指摘しているように、高齢者の仕事は主観的健康感や生活満足度などの心理機能にポジティブに作用し、高齢者の心身に良い影響をもたらすと考えられる。そして新宅ら^[31]が主観的幸福感の高まりが精神的な健康の改善をもたらすと述べているように、仕事を通じた主観的幸福感の高まりは精神の健康に繋がると考えられる。

主観的幸福感について、野村^[32]は高齢者が自らの人生や生活に抱いている充足感を示す概念として用いられる主観的幸福感の高い高齢者は、老化に伴う自分自身や周囲との関係の変化と向き合いながらも、自らの暮らしを肯定的に受け止め、幸福で満たされたものとして感じるとしている。さらに、深堀ら^[33]は主観的幸福感が高い場合、介護予防行動を引き起こすと指摘していることから、高齢者の仕事という社会活動は、高齢者の主観的幸福感を高めて介護予防に繋がる効果があると推察される。

5. 今後の課題

高齢者の仕事の意義は、仕事を行うことで人との交流を通じた社会参加を促進し、高齢者自らの健康感や心理機能にポジティブに作用し良い影響を与えることが示唆された。しかしながら先行研究では、仕事の概念に家事が含まれ、また研究対象が動脈硬化健診を受診した後期高齢者、地方農村部、山間地域、朝市活動等に限定されている。今後はこれらの先行研究に加え、都市部における高齢者の仕事の意義について検証していくことが必要であると考えられる。

謝辞

本研究は大妻女子大学戦略的個人研究費（課題番号S20526）の助成を受けた研究の一部である。

引用文献

- [1]厚生労働省. 簡易生命表概況. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life19/index.html>, (参照 2021-8-2).
- [2]内閣府. https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2020/html/gaiyou/s1_1.html, (参照 2021-8-4).
- [3]高年齢者雇用促進法. <https://www.mhlw.go.jp/content/11600000/000694689.pdf>, (参照 2021-8-4).
- [4]厚生労働省健康局健康課. 「現在の健康づくりの取組と今後の施策について」. <https://www.mhlw.go.jp/content/10800000/000765913.pdf>, (参照 2021-8-6).
- [5]独立行政法人労働政策研究・研修機構. 「高年齢者の雇用・就業の実態に関する調査」. <https://www.jil.go.jp/institute/research/2010/075.html>,

(参照 2021-8-6).

[6]厚生労働省. 「健康寿命のあり方に関する有識者研究会」の報告書. https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_04074.html.pdf, (参照 2021-8-6).

[7]浜崎優子ほか. 地方中核都市における高齢者の社会活動と幸福感に関する研究(第2報). 後期高齢者の主観的幸福感の関連要因. 北陸公衆衛生学会誌. 2007,33(2),p86-91.

[8]中村好一ほか. 在宅高齢者の主観的健康感と関連する因子. 日本公衆衛生誌. 2002,49(5),p409-416

[9]イヒヨンスク. 幸福な老年のための社会参加活動プログラムの成功要因に関する研究. 韓国ウェルネス学会誌. 2017,12,p317-332.

[10]深堀敦子ほか. 地域で生活する健常高齢者の介護予防行動に影響を及ぼす要因の検討. 日本看護学会誌. 2009,29(1),p1-24.

[11]橋本修二ほか. 高齢者における社会活動状況の指標の開発. 日本公衆衛生雑誌. 1997,44(10),p760-768.

[12]近藤克則編. 検証「健康格差社会」介護予防に向けた社会疫学の大規模調査. 医学書院. 2007,p 1-200.

[13]富松知佳ほか. 地域在住健常高年齢者における日常生活動作・生活関連動作の価値序列. 理学療法学 Supplement. 2014,0626.

[14]石谷朋子ほか. 動脈硬化検診を受診した後期高齢者の主観的健康度と孤独感, 社会関連性の実態ならびに主観的健康度に関連する要因. 老年看護学. 2014,19(1),p72-80.

[15]米澤洋美. 地方農村部シルバー人材センター会員の就業の意義. 日本看護学会. 2018,49,p15-18.

[16]杉浦正士ほか. 高齢者の日常生活状況に関与する各種要因の解析第I報:老研式活動能力指標およびうつ傾向評価に関与する因子の抽出. 日本農村医学会雑誌. 2015,64(2),p114-124.

[17]杉浦正士ほか. 高齢者の日常生活状況に関与する各種要因の解析第II報:日常生活状況への「田畑の世話の有無」の関与. 日本農村医学会誌. 2016,65(1),p34-45.

[18]久米正志ほか. 厚岸町における高齢者転倒骨折評価の地域間比較検討—漁村部・農村部・市街部について—. 理学療法学. Supplement 2009(0), E4P2269-E4P2269,2010.

[19]MONMA Takafumi et al.Age and gender

differences in relationships between physical activity and sense of coherence in community-dwelling older adults.Age and gender differences in relationships between physical activity and sense of coherence in community-dwelling older adults.

民族衛生. 2015,81(5),p159-169.

[20]徳山ちえみ. 介護予防につながる高齢者の朝市活動に関する研究—活動意義と健康に関する年齢差—. 川崎医療福祉学会誌. 2011,20(2),p347-356.

[21]前掲[13]

[22]前掲[14]

[23]前掲[15]

[24]前掲[16]

[25]前掲[17]

[26]前掲[18]

[27]前掲[8]

[28]古谷野亘ら. 老年精神医学関連領域で用いられる測度 QOLなどを測定するための測度. 老年精神医学雑誌. 1996,7(4),p431-441.

[29]前掲[19]

[30]前掲[20]

[31]新宅賀洋ほか. 地域レストランを活用した食生活支援プログラム:高齢者の主観的幸福感の形成. 栄養学雑誌. 2013,2013,3,p145-154.

[32]野村千文. 「高齢者の生きがい」の概念分析. 日本看護科学会誌. 2005,25(3).p61-66.

[33]前掲[10]

Abstract

After the partial amendment of the Act on Stabilization of Employment of Elderly Persons, which came into effect on April 1, 2021, in consideration of the newly established measures to provide job opportunities to those between 65 and 70 years of age as well as the obligation to secure employment for people up to age 65, this study aims to clarify the significance of work in the lives of the elderly. To retrieve literature on the significance of work among the elderly, a search combining the keywords “elderly,” “work,” and “significance” was made on the Cinii and Ichushi databases, yielding eight documents. According to the results, one point of significance is that working in old age promotes social inclusion through interaction with others; this in turn creates a virtuous cycle wherein the elderly take better care of their own health, thus extending healthy life expectancy, an indicator that has received attention in recent years. Furthermore, it is conjectured that work has significance as a positive influence on the physical and mental conditions of the elderly, e.g., work-related social activities leading them to engage in physical exercise, thus enhancing their subjective health, or in terms of long-term care prevention owing to work’s positive effect on mental functioning.

(受付日：2022年11月17日，受理日：2022年1月18日)

金 美辰 (きむ みじん)

現職：大妻女子大学人間関係学部人間福祉学科准教授

専門は高齢者福祉・介護予防。現在は「韓国高齢者の仕事と介護予防」に関する研究を行っている。

主な著書：『現代社会と福祉』（共著,電気書院）